

NBF

公益財団法人 日本舞踊振興財団

Information

No.48

2015 SUMMER

目 次

- ◆名手訪問／対談 千住 博(日本画家)
- ◆日本舞踊誌上講座／日本舞踊の歴史を振り返る②
- ◆舞踊家の海外派遣及び招聘
- ◆役員会等の動き、役員等名簿
- ◆平成26年度 正味財産増減計算書
- ◆特別会員芳名
- ◆NBF活動報告・行事予定・編集後記

名手訪問

《対談》

●千住 博（日本画家）

●西川 扇藏（公益財団法人 日本舞踊振興財団 理事長）

[敬称略]

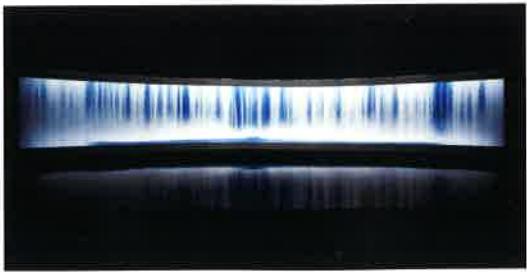


2015年6月2日(火)(於:西川扇藏理事長 稽古場)

西川 今までの日本画の題材の花鳥風月にとらわれず、特に滝の絵でとても斬新なことをされている方なので、古典芸能といわれる日本舞踊で新しいものを作り出していく上でも、お話を伺いたいと思いお願いしました。先生は今ニューヨークに在住されていますが、日本ではなくてアメリカにお住みなのは何故でしょうか。

千住 私が東京藝術大学大学院の博士課を卒業したのは1980年代です。思い出して頂いたらおわかりになると思うのですが、80年代というのはホームページもYouTubeもインターネットも何もない時代です。その時代に現代美術をやっていて、どうやって海外の情報が入ってくるかというと、2ヶ月遅れくらいの美術雑誌です。例えばこれが印象派の時代だと黒田清輝先生、東京藝術大学の産みの親のお1人が、パリに留学したところ、印象派というのが流行っている、これはすごいということで印象派を勉強して日本に戻り、これが世界の最先端だということで東京美術学校でそれを広くご指導されました。でもその時には既に印象派は終わっていました。つまり船で帰ってくる2ヶ月くらいの間に世界の美術がめまぐるしく動いてしまって、印象派から既にその時代にはピカソなどの新しい時代のアートになっていたんですね。1980年代は紙による情報が数ヶ月後にしか入ってこないという時代でした。日本舞踊や歌舞

伎などルーツが日本にあるものとは違い、世界の中で日本の美術をスタンダードに押し上げて行きたいと思ったときに、まず敵を知らないといけなかった。しかし敵を知るのにも情報が全く入ってこない。ですので自分から敵陣に乗り込んでいくしかなかったんです。そういうわけで1980年代の終わりからニューヨークに行きました。今でしたら海外に出て行く必要はないと思います。何故かというと日本に情報も入ってくるし、様々なメディアを使って世界に発信できるからです。そしてそれは日本だけではなく、世界のどこもが文化の中心になる時代になってきました。ある意味では文化というのは地域的なユニークなものですから、むしろ非常に理想的になってきたと思います。ただ1980年代というのはまだ日本には敗戦の影響があり、非常に偏っていてアメリカの文化ばかり極端に入ってきていた。そういう中で一番バランスの取れた方法、日本から離れて始めて日本の文化が見える。当時の日本の学生たち、私たちの周辺というのは混乱していました。日本的なものの日本の美に対して情熱を傾けて学ぼうと思っても、当時の日本の現代アートの人たちはそれを否定する。そういう極論もありまして、どうしても欧米的なものに偏ってしまう。日本の文化がそれほどだめだと言うならば、本当の欧米を実際目で見てみようと思いました。見に行かなければわからないからです。その結果私は日本文化に対して



大きな誇りと自信とむしろ使命感を感じ、その日本の技術を逆にもっと高い質で発信していくということに改めて目覚めた、というのが私の20代から30代つまり今から30年も昔の話です。そういう形で私は書きものをスタートさせました。

西川 私どもも戦後アメリカに着物を着ていったら、じっと見られました。最近は着物の文化も浸透してきたので気にならなくなりましたが。

千住 横山大観がアメリカに行くときに、「自分は着物で行つたらいいか、それとも洋服で行つたらいいか」を岡倉天心に尋ねたという有名な話があります。岡倉天心は「自分の文化に誇りがあるなら着物で行け、そうでないなら洋服を着て行け」とそうお話をされたということなんですね。ですから私は御宗家が和服をお召しになって海外に行かれるということは、まさにこの事だと思います。日本の文化というものを受け入れてもらう、という意味も当時はもちろんありました。今は世界の人たちが、特にヨーロッパの社会がどこかに忘れ去ってしまったことが日本の中にある、という見方をわりとされているようなんですね。例えば日本というのは自然の側に身を置くとか、本当の微細な動きに大きな距離感を感じさせたり、または喜怒哀楽をちゃんとした表情の違いで表したり、そういうことが欧米の文化の中では割と忘れ去られているんです。そういうわけで日本の文化に非常に誇りをもって海外でますますその気持を強くして、そして気がついたら私は57歳です。20歳から絵の世界に入り40年近い日々を制作一筋にやってきています。

西川 ちょうど今20歳からということでしたが、プロフィール等を拝見いたしますと、慶應の幼稚舎から学ばれて突然大学で東京藝術大学というのは、何かきっかけがあったのでしょうか?

千住 高校を卒業する前後に自分に一番備わっているものは何だろうか、と考えました。妹はバイオリニストでコンクールで優勝していましたし、弟は高校時代からずっと音楽をやっていました。弟も妹

ものびのびと自分の好きなことをやっていたのですが、じゃあ私の好きなことはなんだろうと、ものすごく悩みました。でも美術系であることは間違いないと思っていたんです。私はその時に建築やグラフィックデザインも面白いかもしれないと思っていました。しかし決め手にかけていました。そういう中で、私は高校の美術の先生から勧められて日本画の展覧会を観に行ったんです。その時私は大変感動しました。何に感動したかというと、絵の具に感動したんです。この絵の具を使いたいと思いました。その絵の具というのはまさに天然の絵の具だったんです。紙は天然の和紙、接着剤は天然の動物ニカワです。その絵を後になつて日本画と教えられて、それだったら日本画を学ばなければいけないと思いました。日本画で一番厳しい勉強をしたい、そう思ったときに東京藝術大学の日本画科というのがございまして、当時は平山郁夫先生とか吉田善彦先生とか高山辰雄先生とか、いわゆる昭和の巨匠たちがおられた時代です。そこから改めて勉強し直し、2浪して東京藝術大学に入りました。私は美というのは人に勇気を与える、人に生きる力を与えるのだということを、絵の具から教わりました。人に力を与える、勇気を与える、生きる喜びを与える、生きててよかったと思わせる、それが美的感動なんだと、そういうことを人に伝える仕事をしていきたいと思って画家を志したということです。

西川 先生のご兄弟は皆さん芸術系に進まれています。弟さんも大学から音大に行かれた。記事で読んだことがあるのですが、教育方針が非常にユニークな家庭であって、最初から道筋を決めるではない、というようなことを読みました。家庭環境はどのような感じだったのでしょうか。

千住 私が今思い出すことは、私が机の裏側に落書きを書いている、そうすると父が見ていたので、私は落書きを止めました。そしたら父が怒ったわけです。何故かというと、何でやめたんだと。描くなら徹底的に書けと。落書きも止めたら落書きになる。止めなければこれは作品になるんだと。小学生のときにそんな難しい話をしてくれる。そんな父でした。母はとにかく褒め上手でした。私が漫畫のようなものを描いても、バイオリンを弾いても、その度にうまくなつたと、とにかく母は褒めてくれました。小さい子供ですから乗せられて本気にします。それは小さい子供の時だけではなくて、私は50歳を超えて今まで、美術を持ち込むと母が褒めてくれるんです。世間がなんといつても良くなっていると褒めてくれる。私は母が絵のことは素人だというのを置いといて、すごく嬉しいんです。やはり母親に褒められるという

のは嬉しいし、父親が見ていてくれるというのも嬉しいです。好きなことを伸ばすという、そういう環境があったと思います。私も弟も妹もそんな形で自分の好きなことを夢中になってやるということが許される家庭でした。ただ最終的には父と母は私が画家になりたいと言っても、弟が作曲家になりたいと言っても、妹がバイオリニストになりたいと言っても、大反対してきました。でも結局どういうことかというと、父親を最初のハードルにして、父親一人に反対されたからと言つて、乗り越えられないようじゃ世の中にでて荒波で生き残れない。だからまず自分がハードルになると。そこまでおだてて褒めてその気にさせておいて最後に反対をされると、子どもたちはやはり必死になるんです。でも「僕はやりたいんだ」と子どもたちは思う。そこでやはり親からの自立もありますし、本当に本気になり、自分はそれが本当に好きなのかどうか、自問自答するそういう契機も生まれました。やはり親が反対するというのはとても大切なことで、反対されてみてはじめて本当に好きなのかどうか、その父親の反対をも押し切ってやる覚悟があるかどうかと考えることは、特に画家には必要なことだと思います。画家というのは基本的にたった一人でやっています。どこに行っても味方一人いないです。特に普段になってからは良い絵が描けて当たり前なわけで、変な絵を描いたらそれでお終いです。たった一人でやっていくしかない。ただ私は多くの仲間、非常に心の通じる場所であるとか、いろいろな美術館の関係者とかコレクターとかそういう方々に大変恵まれてはいます。ただどう描くかの判断は、私しか決められないんです。1センチずらすのか、赤をピンクにするのか、答えは自分が出すしかありません。自分が答えを出さないかぎり明日になんでも明後日になんでも動かないままそこに置いてあるわけです。その時に常に決断していく人生、常に決断して思い切ってやり、だめならやり直す人生。ですから常に想定外に追いやりられているわけです。毎回想定外であり、かつ毎回敗者復活戦的なことがあるんです。これはよほど自分に対してある覚悟がないと、どんどんだらけてしまします。楽な絵、楽な絵へと変わっていくし、冒険も挑戦もしなくなってしまうんです。ましてや外の世界に問うなんていうことも、とても勇気のいることですので、どうしても倦怠しがちになってしまう。でもそうではなくて常に挑戦をしていくという考え方が必要で、反対を押し切つてなった絵描きだ、なにより好きだったんだろう、



ということを絶えず自分で立ち返ります。

西川 先ほどお話をさせていただいたように、日本画というと花鳥風月というイメージを我々持っているのですが、その中であえて「滝」というものが代表作になっていらっしゃる。「滝」を日本画のテーマになされたのは何故でしょうか。

千住 私は桜を描いたり、または森林を書いたりもします。例えば先々週までベネチアにいましたが、ベネチアは5月でもダウンパーカーを着ていないと寒いです。かと思うとその次の日からTシャツでも暑かったりします。つまりベネチアは春がなく、冬から夏なんです。四季がありません。私が住んでいるニューヨークもあるのは冬と夏だけです。そういう中で世界を見ていたときに、日本というのは4つの季節がある。春になれば梅も咲くし桜も咲く、夏になると実に見事な青葉が、秋になると紅葉があり、冬になると雪が降る。四季がある国は本当に世界の中でわずか、四季の移り変わりに感動するのは日本人の感性でとても大切なことだと思うんです。そして周りが海に囲まれていますから、毎日新鮮な魚が採れる。そういう宝の上に住んでいるようなものです。その宝の中で最もそのエネルギーを与えているものはなんだろうと考えたときに、「滝」だったのです。日本の中で「滝」を見たときにそこが風景全体の要のように思われたんです。非常に惹きつけられた。だから「滝」こそ実は日本の象徴だと思ったんです。でもそれと同時に実は「滝」というのは重力で水が落ちてくるだけの話なんです。でも宇宙を考えてみると、水があるという惑星はほとんど奇跡で、私たちが生きていけるような重力がある星というのも奇跡です。水が上から下にこんなにきれいな形でバランスよく流れるというのはそれだけでも奇跡なんです。何故かというと地球の特徴は水があること、適度な重力があること、適度な温度があることです。それを表すものは何かというと「滝」だったんです。日本と同時にあらゆる境界を越えて人間が地球について考える最も普遍的なあるメッセージが「滝」の中にはあったんです。そう考えているときに、このモチーフは本当に大切なモチーフだと思ったんです。例えば松尾芭蕉も「風雅におけるもの、造化(ぞうか)に隨(したが)ひて四時(しじ)を友とす」と詠んでいます。「滝」自身の水の形、流れる自然の形をうまく自分の作品の中に取り入れるときに、自然と自分とのコラボレーション、その時が一番すばらしい作品が生まれるかもしれない、という松尾芭蕉からのメッセージを感じたわけです。そういうふうなことを考えますと、やはり「滝」というものが持っている何かとてつもない魅力、そこ

にとても惹きつけられたということです。

西川 画家になられる方の一番厳しいところはどんなことでしょうか。技術的な問題なのか、感性であるのか、それともバランスなのか。

千住 私が考えますのは、芸術家にとって何が一番厳しいかというと、絶えず自分にあるものは何か、ないものは何かを考えさせられる天才的な仲間たちが、周りにいるということです。自分をうぬぼれさせる環境ではない、これがとても大切だと思います。自分は天才かもしれない、と思ったらそこでお終いです。東京藝大の我々の代もそうですけど、皆大変な浪人をして入ってきます。私は2浪で入りましたけど、学年で一番多いのは5浪なんです。そういう中で皆さん本当に各地方の天才と言われた連中が一部屋に集められて、皆お互いこんなはずじゃなかったと思うんですね。うかうかしていると自分がいつビリになってしまかもしれない。うぬぼれさせない環境が大切なんだと思います。そしてそのうぬぼれさせない環境と絶対に褒めない先生。私は東京藝大に博士課程まで入れて9年間いました。9年間の間で褒められたことは3回だけです。それは私だけではなく皆そうで、3回褒められただけでも奇跡的なことなんです。1回も褒められないどころか、けなされもしないで、一言も言ってもらえず卒業するということが割りと多いのです。そういう意味でこれはどうみても厳しい学校と言っていいと思います。やはり良い学校とは何かといったら厳しい学校です。厳しい学校とは何かというと、今言ったように、とにかく勘違いしないですむこと。常に先生がより高次元のものを目指して指導してくれていることです。もう一つ今になって思いますのは、藝大を出て何十年も経っていますが、結局その仲間たちがどれだけ世の中に出たのかをみても、本当にいないです。ですから芸術の世界というのは才能だけではなく、人とのご縁ということがすごくあると思います。ただご縁というのは、待っていれば来るのではなくて、真摯に誠実に向かっていくことで開かれていくことがとても多いのではないかと思います。絵の才能だけで絵描きになれるということは、絶対にない。それは藝大を受けた誰もが思っているし、逆にそういう人たちが今、私を見て、才能は俺と同じだった、でもやはり千住はラッキーだった、というふうに皆言うと思いますし事実そうだと思います。私は誰よりラッキーだつたんです。

西川 我々がイメージする画家の方や芸術に関わっている方は、皆さん総じて変わっている方が多いよう

に思うのですが。

千住 おっしゃることはわかりますが、本当の世界のトップの人達というのは、とてもフレンドリーでとてもグレートコミュニケーター達です。日本画の巨匠というのはわりと、返事をしても返ってこないような方が多いのですが、世界の歴史に残っているような巨匠たちというのは、私が無名の作家で絵を見せにいっても、ちゃんと見てくれますし、展覧会も大変なお年でもわざわざ見に来てくださったりします。本当の世界の頂点の人たちは、とても人間的にバランスがとれています。ちょっと風変わりで人当たりが悪くてという人には、その上の人達がいます。その上の人達はとても地味だし謙虚です。派手な服装で、俺を尊敬しろ、俺を崇拜しろ、なんていう人は誰もいません。それはその通りだと私はとても教わりました。

西川 トップに立つ方は非常に社会性のある、人間的にも開かれた方だということですね。結局最終的には人間力でしょうか。

千住 人間力というか、そもそも芸術とか表現とは何かというとコミュニケーションです。つまり私が絵を描いたり、御宗家が踊られたりするのは、自分のイマジネーションを何とかして伝えようとする、表現者というのは基本的にコミュニケーターなんです。だからコミュニケーションする能力がとても必要です。表現者の仕事というのは、わかり合えない人たちが、わかり合うために、自分のイマジネーションを何とか伝え合って、私もそう思うという共感を得るということだと思います。ようするに芸術や表現は基本的に世界平和のために存在していると言っていいと思うんです。わかり合えない人と、わかりあうために、私たちは踊りを踊ったり絵を描いたりしているのだと思います。このことを私は大学で学長をしていましたので「今皆さんがやろうとしていることは、お互い分かり合おうとすることをやっているのだから、廊下で会ったらまず『おはようございます』と挨拶しましょう。そこが基本ですよ」と全ての学生たちには随分話をしました。



- 西川 先生は紙に描くこと以外にも、成田空港ですか森ビルにも作品を残されていますが、キャンバスに描かれるものとは違ったアプローチの仕方があるのでしょうか。
- 千住 極端なことをいうと、私は絵も描きますしビデオアートのような映像もやります。去年は紅白歌合戦で、石川さゆりさんの背景の映像を私が担当しました。文章も書いていて本も10冊以上出しています。でも全部一緒に、全部自分の脳の同じ部分が点滅しているということがわかります。何か創造的なことを感じて、何とかしてそれを伝えたい時に文字で出すときもあれば、絵に描くときもあれば、スタッフを使って映像にする時もある、意識は全く同じです。日本画を描いていると、絵の具が乾く時間が必要です。その待ち時間に文章を書いたり、舞台美術のことを考えたり、映像のことを考えたり、壁画のことを考えたり、同じ脳を使いながらエンジンを切らないでいます。エンジンを切るとまたスタートさせるのが大変なんです。エンジン切らないままずっと朝から仕事場にいて、絵を描いたり、絵が乾くのを待っている間に文章を書いたりということで、同じ部分が動いているという自覚を持ってやっています。
- 西川 何年か前に日本舞踊協会公演の担当をされていたと思うのですが。
- 千住 そうですね。井上八千代さん、花柳寿輔さんの舞台の映像も担当しましたし、玉三郎さんと寿輔さんの舞台もさせていただきました。それ以外にもオペラも今まで2つ程やりましたし、進行中の新しいオペラも1つあります。そういう舞台美術というのは実はとても興味がありまして、私は東京藝大を卒業するときに、本当はNHKに舞台美術で就職しようと思っていたんです。朝倉撰先生という方について舞台美術をずいぶん勉強していました。朝倉先生にはいつもしかられていました。でもそういうしているうちに本当にひょんなことに、東京藝大を主席で出てしまったんです。主席で出てしまったら絵描きになるしかない、そうでなければ仲間に申し訳ないと思いました。主席で出たので舞台美術はいざれという形で置いておきながら、画家としてとにかく一角のところに行くまで、しっかりがんばろうと思っていたんです。最近になって舞台美術のお声がかかってきて、コンピューターを使い滝の絵が動いていたり、森が動いていたり、桜の花びらが散っていたり、それはたぶん世界でも非常に珍しいことだと思います。メトロポリタンオペラも毎月見に行っていますが、ああいう形で動く絵というのは、本当にこれからこの領域だと思います。ですからその方向でも私はやりたいことが沢山ありますが、体が一つですので、時間的にぎりぎりまではやってはいますけれども限りがありますね。
- 西川 先生の美術館が軽井沢にあります、あえて軽井沢になされた理由というのは何故でしょうか。
- 千住 基本的に私の大きなコレクターがその場所にあったということがあるのですが、もう1つは軽井沢の実に豊かな森の中に4面全部ガラス張りの美術館を建てたんです。そうすると絵を見るような意識で周りの木を見る事ができる。つまり木に対してもっと愛情が持てるようになり、木を見るような自然な気持ちで絵を見る事ができるのではないかと。木立の中に普通に絵があるような形です。しかし21世紀これ以上人間が自然を破壊すると本当に地球はおかしくなると思うんです。だから新しい21世紀型の芸術を通して自然をもう1回見直してみること。木を見てまたは花を見て感動するような気持で絵を見るという、一番最初の氷河期時代の人々が初めて絵を描いたときの感動のようなものに、もう1回立ち戻る。そういうきっかけにもなればいいのかなと思いました。そういうことで軽井沢の美術館というのは未来への提言のようなところがあります。美術館は敷居が高いという印象、それをなくすことが出来るんじゃないかなと。もっと身近に絵をみてもらえる、というような提案も含んで全面ガラス張りという、建築力学的には限界の1歩手前みたいな建築ですが、とてもご評価を頂いています。
- 西川 今後の活動について教えて下さい。
- 千住 結局今、特にオリンピックということを目前に控えて世の中はクールジャパン、クールジャパンといわれています。でもクールジャパンというのは煎じつめればラーメンとアニメです。私は海外の人が圧倒的に興味があるのは日本のクラシックジャパン、いわゆる日本舞踊、歌舞伎、能、狂言、もちろん日本画もあるし、お茶、生け花などだと思います。なぜ今の日本というのはそういう自らの誇るべき伝統、大きな長い歴史のあるものに蓋をしているのか、アニメや漫画など秋葉原の風俗のような新しい文化に着目をさせるのか、というのがとても不本意なんです。日本の美というものを日本に生まれた以上は、世界に知らしめる、そのための努力を惜しまないようにしていきたい。日本はどうしてもクールジャパン、クールジャパンと言いつている風潮があります。もっと派手なものを求める風潮が、正論をかき消すようなことになってしまってはいけないと思います

し、そのためにこれからも出来る限りのことはやっているこうと思っています。だから私は自分で日本画家と名乗っています。普通だったら海外である程度了解を頂いていたら、芸術家とか美術家とか現代アーティストなど、自分の肩書きをそういうと思います。私は頑なに日本画家といっています。日本画は日本人にしかわからない絵では決してないのです。全世界の人が等距離で接することができるものです、ということを伝える一つのメッセージのつもりで日本画家と言っています。

西川 これから東京オリンピックに向けて我々にもいろいろな話があるので、今先生がおっしゃったように、きちんとした方向にうまく進んでいってもらいたいと思います。

千住

やはり文化に関わる政治の責任者の方に本当にきちんと勉強してほしいと思います。アメリカの何がすごいかというと、美術館のディレクターもすごいのですが、そのディレクターを任命できる、文化のことをきちんとわかっている政治家がいる、というところなんです。では日本はどうなんだろうと言ったときに、旗頭がクールジャパン、クールジャパンだと、やはり寒々しいものがあると思います。

西川

おっしゃる通りです。まず日本人が自らの伝統を理解し大切にしなくてはいけませんね。本日は素晴らしいお話を長い時間ありがとうございました。

千住 博氏 プロフィール



1958年1月7日 東京都杉並区に生まれる。
1964年 慶應義塾幼稚舎(小学校)に入学。
1970年 慶應義塾普通部(中学)に入学。
1974年 慶應義塾高等学校(高校)に入学。
1978年 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻に入学。
1982年 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。
1984年 東京藝術大学大学院修士課程修了、修了制作藝大買上
1987年 東京藝術大学大学院博士課程修了、修了制作東大買上
1988年 ガレリアフォルニ (ボローニャ・イタリア)にて個展
1989年 オーストラリア・シドニーにあるマンリー市立美術館で個展。
「ジ・エンド・オブ・ザ・ドリーム」を発表。
1990年 神奈川県立近代美術館で「収蔵作品による近代日本画の歩み展」に参加。
1993年 ニューヨークの美術誌「ギャラリーガイド」の表紙に選出される。同年ニューヨークのマックスウェルデビッドソンギャラリーで個展。「Flatwater」を発表。
1994年 山中湖高村美術館で個展「千住博 1980 - 1994展」。同年「星のふる夜に」に対し第4回けんぶち絵本大賞を受賞。同年第7回MOA 岡田茂吉賞絵画部門優秀賞受賞。
1995年 創立100周年のヴェネツィア・ビエンナーレ絵画部門にて名譽賞を東洋人として初めて受賞。同年台湾台北市美術館で開催された「千住博展」はピカソに次いで二人目の会期延長となった。



1996年 雕刻の森美術館で個展。
「千住博 Waterfalls & Glasses」展。
1998年 大徳寺聚光院の襖絵制作にとりかかる。
同年広島市現代美術館収蔵「八月の空と雲」に対し紹経褒章受賞。
2000年「ライフ」に対し河北倫明賞受賞。
2002年第13回 MOA 岡田茂吉賞絵画部門大賞受賞。
2003年 大徳寺聚光院別院襖絵完成。東京国立博物館で一般公開。グランドハイアット東京に高さ3メートル横幅25メートルの襖の壁画を作成。
2005年第44回ミラノサローネ「レクサス・L フィネス」にコラボレーションアーティストとして参加。アートディレクションと絵画を担当。
2006年 フィラデルフィア松風荘襖絵(ウォーターフォールシリーズ)完成。
2010年 APEC2010首脳会議の会場構成担当。
2011年 東京国際空港(羽田)第1、第2、国際線ターミナルのアート・プロデュース/ディレクションを担当。同年アートディレクションを担当したJR九州博多駅が完成。同年「軽井沢千住博美術館」開館。
2013年 大徳寺聚光院京都本院の襖絵全てが完成。
2014年 オペラ「夕鶴」の舞台美術を担当
2015年第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ「Frontiers Reimagined」展出品(ヴェネツィア、イタリア)

現在、京都造形芸術大学同付属康耀堂美術館館長。京都造形芸術大学・東北芸術工科大学「藝術学舍」学長。2007年より2013年3月まで京都造形芸術大学学長を務めた。

隅田川物の系譜①

東京大学文学部 教授

古井戸 秀夫

「隅田川物」のもとになる原典は、謡曲の『隅田川』です。世阿弥の嫡男、観世十郎元雅の作でした。母が子を尋ねる狂女物の能は、現在、五曲伝えられています。そのうちの二曲『桜川』『三井寺』は世阿弥の作、残りの二曲『柏崎』『百万』も世阿弥が改定したものでした。『狂女物』の能は、世阿弥によって確立されたものだと言ってもよいでしょう。

世阿弥は「物狂」の能のことを「この道の第一の面白づくの芸能なり」(『三道』)と評しました。春の名曲『桜川』では桜に戯れ、秋の『三井寺』では名月に遊び、面白う狂うて見せる。『桜川』の母は、川に流れる花びらを扇で掬い、網で掬い、歌を歌って舞います。『三井寺』では、「初夜の鐘を撞くときは、諸行無常と響くなり」と「鐘の段」を歌って、面白そうに鐘を撞くのでした。世阿弥は、ただ面白く歌い舞うだけでは駄目だ、なぜ狂うているのか、そのことを忘れてはなりません、と諭しています。舞歌は芸能の「花」です。その「花」に心をこめなさい。そのようにして人を泣かせることができれば、それが本当の名人なのです、と説きました(『花伝書』)。

『桜川』の母は九州の日向の人でした。子を尋ねて彷徨ううち常陸の桜川まで来てしまったのです。『三井寺』の母は駿河の清見が関で子を攫われ、都に上って清水寺に参籠、観音のお告げにより三井寺で我が子と再会するのでした。『桜川』も『三井寺』も、京の都から遠く離れた母と子の物語でした。元雅はそれを、京の母と子の物語にしようとしたのです。その母が辿り着いたのは武藏の国の隅田川。川を渡ると下総の国になる。東(あずま)の涯、そこから向こうは道の奥、陸奥の入り口になる。『桜川』では「げにげに昔の貫之も、遙けき花の都より、いまだ見もせぬ」ところだとしました。

『源氏物語』や『平家物語』など能の原作

のことを「本説(ほんぜつ)」と言います。「本説」のない「作り能」のときは、和歌などでなじみの深い名所や旧跡を使いなさい、と世阿弥は教えていました(『三道』)。元雅はその家訓に従ったのでしょうか、業平の東下りで知られる隅田川を舞台にしました。

『伊勢物語』の主人公「むかしおとこ」在原業平は、京ではもう自分は必要のない男だと新天地を求めて東に下りました。同行したのは「友とする人、ひとりふたり」とあります。三河の八橋では、その友のひとりに「かきつばた、といふ五文字を句の上に据へて、旅の心を詠め」と言わされて戯れに「折句(おりく)」を詠み、富士山を見ては「比叡の山を二十ばかり重ね上たらん程」だなあ、とのんきなことを言っています。さすがに隅田川まで来ると淋しくなり、望郷の念にかられるのでした。見たこともない白き鳥の名を問うと、渡し守は「みやこ鳥」と答えました。「みやこ」という懐かしい名を聞いて、思うのは京に残してきたのことでした。業平は「名にし負はば、いざ言問はんみやこ鳥、わが思ふ人はありやなしや」と詠うのでした。恋人を思う業平の思いに、元雅は子を尋ねて彷徨う母の心を重ねたのでした。

世阿弥には、『五音(ごおん)』という伝書があります。謡の面白さを五つに分類して、代表的な例を挙げたものでした。『桜川』の母の謡う「これに出でたる物狂い」は、花やかで美しく余情豊かな「幽曲」の曲でした。一方、「人の親の心は」と謡い出す『隅田川』の母の謡は「哀傷」の曲でした。「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ」は『後撰集』、「聞くや如何に上の空なる風だにも」は『新古今集』、ともに子を思う親の歌でした。元雅は、「千里を行くも親心、子を忘れぬ」(『白氏文集』)や「四鳥の別れ」(『孔子家語』)という中国の故事も引用しました。淋しさのあまりに、面白

う狂うことなどできない、母を描こうとしたのでしょう。「思へば限りなく、遠くも来ぬるものかな」と嘆くところは、「仕舞」にも舞われる能の型の見どころになっています。

元雅は、父のいう「面白づく」の歌や舞の替りに、「カタリ」を用意しました。ワキの舟人が語るのは、去年三月十五日、しかも今日、馴れぬ旅の疲れで亡くなったひとりの少年の話でした。隅田川を渡る舟の内で、狂女はその話を聞きました。「いかに舟人」と狂女が問うと舟人が答えます。児の年は十二歳、その名は梅若丸、父の名字は吉田の某。親類や母は尋ねてきましたかと問うと、「思ひもやらぬこと」と答えた。それもその筈であろう、その幼き者こそ、この物狂いが尋ねる子である、「これは夢かや、あら、あさましや候」と嘆く。そのとき少し俯いた能面の顔に翳が差す、能の型ではこれを「曇ル」と称しています。曇った顔に手を添えると、泣いているように見える、「シオル」と呼ばれる能を代表する型のひとつになります。『隅田川』の母の悲しみは深く、

両手で「シオル」のでこれを「モロジオリ」と呼んでいます。

梅若丸の母が念仏を唱えると、塚の中からも念仏の声が聞こえてきました。驚く母の目には、わが子の姿が見えました。世阿弥は、それは幻影だから子方を出してはいけないよ、と咎めました。それに対して元雅は、それではできません、と反撥しています。のちに世阿弥は、試してみてから決めればよいのに、とその思いを述べています(『申楽談儀』)。六十歳を迎えた父の心境でした。その七年後、元雅は旅先で急逝しました。三十歳を過ぎたばかりの花の盛りの死でした。世阿弥は、元雅の姿が幻のように見えて筆が乱れると言い、「思ひきや身は埋れ木の残る世に、盛りの花の跡を見んとは」と詠じました(『夢跡一紙』)。その思いは、「留め拍子」を踏むこともできずに俯いて「シオリ留」になる、梅若丸の母の姿に重なるものでした。



〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町2-3-14

ツカモト堀留ビル6階

フリーダイヤル

ごふくわいづつや
0120-5290-58

KAKEHASHI Project 舞踊家の海外派遣及び招聘事業

当日本舞踊振興財団では外国人への日本舞踊普及活動の一環として舞踊家の海外派遣及び招聘という事業を行っている。今回はその活動の一つである来日した外国人へのレクチャーデモンストレーションについて述べていく。

2013年より当財団でも度々海外でのレクチャーデモンストレーション等々で協力を仰いでいる国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は政府（外務省）が推進する北米地域との青少年交流の一環として、"KAKEHASHI Project -The Bridge for Tomorrow-" を実施している。KAKEHASHI プロジェクトとは、日本に対する潜在的な関心を増進させ、訪日外国人の増加を図るとともに、日本の価値やクールジャパンといった我が国の強みや魅力等の日本ブランドへの国際理解を増進させることを目的として行われ、事業の実施を通じて日本経済の再生と活性化に資する効果も期待される。この青少年交流事業を通じて、日米の相互理解の深化、将来の日米交流の担い手層のネットワーク形成並びに青少年層におけるグローバル人材の育成を推進している。

上記の KAKEHASHI Project では具体的に日本の高校生・大学生等が全米各地を訪問し、米国での交流事業やホームステイ等を通じて、日本の強みや魅力を発信する目的である日本の青少年の米国短期派遣、逆に米国の高校生・大学生等が日本各地を訪問し、地方文化、歴史的遺産、最先端技術の視察や、学校交流、ホームステイ等を行い、日本の魅力に対する理解を深める目的である米国の青少年の短期招聘を行っている。

日本舞踊振興財団では KAKEHASHI Project に協力する形で米国から短期招聘された青少年達に対してレクチャーデモンスト

レーションを行った。初めは平成 26 年 5 月に 3 日間に渡り米国大学生に対し、その後 7 月にも同じく米国大学生に対し、11 月には米国若手ファッショントレーナーに対し、平成 27 年 3 月には米国現代美術家に対しレクチャーデモンストレーションを開催した。会場は西川扇藏理事長稽古場や国際交流基金内さくらホールを使い、各回 1 時間強の時間枠であった。

内容は素踊りを見た後扇子、手拭いを使っての様々な表現を伝え、その後参加者を舞台にあげ扇子、手拭いを渡し体験をしてもらう。そして、最後にもう一番舞踊を見せ終了となる。今回の米国ファッショントレーナーや現代美術家へのレクチャーデモンストレーションで特化した事は「藤娘」の衣裳、小道具の実物を用意し、実際に触れ、更にその衣裳を身につけた事、かつらをつけた写真が載った資料を配布した事である。流石にファッショントレーナーやアートに携わっている人達であり、衣裳や小道具の色彩、美しさに興味を示し見入っていた。講師である西川箕乃助が衣裳の着付け方や小道具の扱いを丁寧に説明をした上で、配布した資料を閲覧し更には自身で着付けをして貰うと、なるほどと理解したようである。実際衣裳を着た男性アーティストはとても楽しそうであった。今回の学生、デザイナー、アーティストもそうであったが、外国人に対してレクチャーデモンストレーションを行うと非常に盛り上がる。上でも書いたが、舞台にあがり、扇子や手拭いを使って様々な表現を行う時などは非常に積極的に参加をする。特に今回の KAKEHASHI Project に参加した米国青少年に関しては少なからず日本の文化に興味を持っている人が参加しているので、最後に行う質疑応答の際にも的確な質問が多数あり日本文化への興味の深さを感じることができた。

彼らが帰国した後書かれた感想には「憧れていた日本文化に直接触れる事が出来て感動した」「帰国後も引き続き日本文化のリサーチを続けていきたい」等々日本文化に対し肯定的な意見が書かれている。日本舞踊の外国人への普及を活動指針の1つにしている当財団としても、この様な事業に関わる事が出来て非常に光栄であり、今回来日した青少年達が日本舞踊を始めとする日本文化に引き続き深く興味を持ち、更には日本文化を米国で広めてくれる事を切に願う。

また同様の企画が今後も開催される事を熱望している。



役員会等の動き

理事会

開催年月日	議事事項	会議での結果
平成27年3月25日	第1号議案 平成27年度事業計画(案)について 第2号議案 平成27年度収支予算(案)について	満場一致で可決 満場一致で可決
平成27年5月19日	第1号議案 平成26年度事業報告(案)について 第2号議案 平成26年度決算報告(案)について	満場一致で可決 満場一致で可決

評議員会

開催年月日	議事事項	会議での結果
平成27年5月27日	第1号議案 平成26年度事業報告(案)について 第2号議案 平成26年度決算報告(案)について 第3号議案 理事・監事の選任について その他 平成27年度補正事業計画と平成27年度補正予算の説明	満場一致で可決 満場一致で可決 満場一致で可決

公益財団法人日本舞踊振興財団 役員等名簿

(50音順・敬称略)

理事長

西川 扇藏

業務執行理事

西川 均

理事

青山 幸恭

大野 輝康

木島 一郎

今野 由梨

登 誠一郎

花柳 寛
(花柳 壽輔)

藤間 高子
(藤間 勘組)

三隅 治雄

水野 豊

監事

小山 敬次郎

半澤 進

内堀 祐子
(西川 祐子)

越智 久男

景山 正隆

近藤 瑞男

龍居 竹之介

田中 英機

田村 直子
(西川 扇生)

評議員

鳥越 文藏

中村 作二

波多 一索

福田 博

藤田 洋

藤田 康幸

古井戸 秀夫

丸茂 美恵子
(丸茂 祐佳)

平成26年度 正味財産増減計算書

NBF

平成26年4月1日から平成27年3月31日まで

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1) 経常収益				
① 基本財産運用益	420,356	422,659	△ 2,303	
基 本 財 産 利 息	420,356	422,659	△ 2,303	
② 受取会費	5,390,000	6,260,000	△ 870,000	
普 通 会 員 会 費	2,990,000	3,260,000	△ 270,000	
特 別 会 員 会 費	2,400,000	3,000,000	△ 600,000	
③ 事業収益	4,199,880	4,974,000	△ 774,120	
青 少 年 に 対 す る 舞 踊 普 及 事 業 収 益	161,880	910,500	△ 748,620	
舞 踊 家 の 海 外 派 遣 及 び 招 聘 事 業 収 益	995,000	0	995,000	
在 日 外 国 人 、 留 学 生 啓 蒙 普 及 事 業 収 益		505,000	△ 505,000	
自 主 公 演 活 動 事 業 収 益	360,000	401,500	△ 41,500	
日本 舞 踊 の 新 人 養 成 事 業 収 益	103,000	107,000	△ 4,000	
講 演 会 の 開 催 事 業 収 益	30,000	520,000	△ 490,000	
日本 舞 踊 に 関 す る 広 報 活 動 等 事 業 収 益	2,500,000	2,500,000	0	
制 作 協 力 等 支 援 事 業 収 益	50,000	0	50,000	
衣 裳 音 器 等 の 貸 与 事 業 収 益	956,080	976,770	△ 20,690	
④ 受取補助金等	442,000	0	442,000	
受 取 补 助 金	514,080	976,770	△ 462,690	
受 取 地 方 自 治 体 助 成 金	0	0	0	
受 取 そ の 他 助 成 金	240,000	240,000	0	
(5) 受取寄付金	240,000	240,000	0	
受 取 寄 付 金	181,288	229,186	△ 47,898	
(6) その他の収益	1,343	1,514	△ 171	
受 取 利 息	800	800	0	
受 取 配 雜	179,145	226,872	△ 47,727	
経常収益計	11,387,604	13,102,615	△ 1,715,011	
(2) 経常費用				
① 事業費				
給 定 料	8,020,973	9,446,777	△ 1,425,804	
法 定 手 利	1,737,652	1,274,672	462,980	
会 旅 通 手 利	21,020	22,531	△ 1,511	
消 印 刷 費	0	0	0	
印 光 質 諸 費	78,101	37,954	40,147	
印 光 質 諸 信 通 搬	237,869	526,630	△ 288,761	
印 光 質 諸 信 費	0	531,753	△ 531,753	
印 光 賴 刷 費	1,202,280	1,554,495	△ 352,215	
印 光 賴 刷 費	5,353	6,647	△ 1,294	
印 光 賴 刷 費	605,120	770,300	△ 165,180	
印 光 賴 刷 費	3,543,000	4,221,000	△ 678,000	
印 光 賴 刷 費	391,120	335,950	55,170	
印 光 賴 刷 費	199,458	164,845	34,613	
印 光 賴 刷 費	3,325,398	3,313,439	11,959	
印 光 賴 刷 費	306,645	224,942	81,703	
印 光 賴 刷 費	3,709	3,976	△ 267	
印 光 賴 刷 費	0	10,000	△ 10,000	
印 光 賴 刷 費	145,895	124,146	21,749	
印 光 賴 刷 費	169,900	188,880	△ 18,980	
印 光 賴 刷 費	274,634	352,397	△ 77,763	
印 光 賴 刷 費	14,000	37,582	△ 23,582	
印 光 賴 刷 費	100,688	21,532	79,156	
印 光 賴 刷 費	82,620	164,040	△ 81,420	
印 光 賴 刷 費	0	201,125	△ 201,125	
印 光 賴 刷 費	945	1,173	△ 228	
印 光 賴 刷 費	90,000	90,000	0	
印 光 賴 刷 費	4,000	8,600	△ 4,600	
印 光 賴 刷 費	0	0	0	
印 光 賴 刷 費	1,296,000	1,282,575	13,425	
印 光 賴 刷 費	836,362	602,471	233,891	
経常費用計	11,346,371	12,760,216	△ 1,413,845	
当期経常増減額	41,233	342,399	△ 301,166	
2. 経常外増減の部				
(1) 経常外収益	0	0	0	
経常外収益計	0	0	0	
(2) 経常外費用				
経常外費用	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	41,233	342,399	△ 301,166	
一般正味財産期首残高	119,770,406	119,428,007	342,399	
一般正味財産期末残高	119,811,639	119,770,406	41,233	
II 指定正味財産増減の部				
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	119,811,639	119,770,406	41,233	

特別会員 ご芳名

日本舞踊振興財団では、特別賛助会員制度を設け、下記の方々にご支援をいただいております。是非ご参加をお願い申し上げます。

- ◎会費 1口 10万円(1年間)
- ◎特典 会報のご送付
会報・公演プログラム等にご芳名掲載
財団主催イベントにご招待

飯田 侃	竹内 小道具	(演劇舞踊小道具店)
飯田 君子	東京信用金庫	(理事長 半澤進)
飯田 信子(飯田不動産代表)	東信企業(株)	(代表取締役 金澤克夫)
飯田 全子(和光不動産(株)代表取締役)	西川井扇	
市田(株)井筒工芸ディビジョン	(株) 西	菱
(有)かつら大阪屋(代表取締役 長坂誠一郎)	NPO法人日本伝統芸能振興会	(会長 石田寛人)
金井大道具株式会社(代表取締役 金井勇一郎)	NPO法人日本文化研究所	(理事長 木村知躬)
歌舞伎座舞台(株)	(株)ビデオフォトサイトウ	(代表取締役 斎藤政雄)
(有)ギャラリー竹柳堂(代表取締役 藤澤繁)	報知新聞社	(代表取締役 早川正)
向陽開発(株)(代表取締役 鈴木甫沙子)	(株)ホテルオークラ東京	(代表取締役社長支配人 清原當博)
松竹衣裳(株)(代表取締役 酒井誠一)	藪本俊一	(株古美術藪本 代表取締役)
セガサミーホールディングス(株)(代表取締役会長兼社長 里見治)	山本化学工業(株)	(代表取締役 山本富造)
関根愛子	(株)吉岡衣裳	(代表取締役 清水喜重郎)
大東建設(株)(代表取締役 斎藤満宣)		
(株)瀧川峰晴堂(代表取締役 瀧川明行)		

◆財団の趣旨にご賛同いただける方は財団事務局までご連絡ください。特別会員についてご説明いたします。その上でご希望の方には申し込み書類をお送りさせていただきます。
財団事務局 TEL 03-3354-5496

NBF行事予定

- ◆ 新宿区「こども文化体験プログラム」－日本舞踊－
日 時：平成 27 年 8 月 3 日(月)～5 日(水)
会 場：新宿区四谷地域センター

◆ 第 50 回講演会

- 日 時：平成 27 年 8 月 28 日(金)
会 場：東京信用金庫本店 8F ホール
講 師：織田 紘二
演 題：「日本舞踊の楽しみかた」

- ◆ 文化庁伝統文化親子教室－新宿区日本舞踊こども教室－
日 時：平成 27 年 10 月～平成 28 年 1 月
会 場：新宿区内公共施設



NBF活動報告

◆ 幼稚園おどり教室

- 日 時：平成 27 年 2 月 23 日(月)
会 場：東洋英和幼稚園
内 容：幼稚園児に自然な雰囲気から「日本舞踊」に親しむように企画した啓蒙活動

◆ 仕舞教室・狂言教室合同発表会

- 日 時：平成 27 年 3 月 14 日(土)
会 場：杉並能楽堂
内 容：二年間の稽古の成果を見せるべく本物の能楽堂で発表会を行った

◆ 宇都宮市日本舞踊鑑賞教室

- 期 間：平成 27 年 5 月 14 日(木)
開催地：栃木県宇都宮市
演 目：長唄「操三番叟」長唄「手習子」
内 容：我が国が世界に誇る伝統芸術である日本舞踊の更なる普及、発展を目的としている事業。新進気鋭の若手舞踊家による舞台と観客に対してのワークショップを行った



公益財団法人日本舞踊振興財団 「NBF」 No.48

発 行 公益財団法人日本舞踊振興財団
〒162-0065 東京都新宿区住吉町
10-8 片桐ビル 301
印 刷 株式会社デイエムピー
発行日 平成 27 年 7 月

編集後記

とても天候不順の今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか。今年も夏に新宿区文化体験プログラム、秋から伝統文化親子教室といった児童に対する普及活動がございます。皆様の暖かいご支援を常日頃感謝しております。今後も今まで以上に日本舞踊の普及発展に勤しむ所存でございます。今後とも宜しくお願い申し上げます。